

## 研究調査報告

# 女子学生が制作・実演した紙芝居 —「戦時下国策紙芝居と大衆メディアの研究」班 日本 女子大学成瀬記念館所蔵「おとな紙芝居」調査報告—

松本 和樹

(非文字資料研究センター 研究協力者)

## はじめに

2023（令和5）年8月3日、日本女子大学成瀬記念館で調査を実施した。そのきっかけは、日本女子大学成瀬記念館の杉崎友美氏から当班研究員新垣夢乃氏への所蔵資料の情報提供だった。当日は杉崎氏の立ち合いの下、紙芝居（「戦時家計生活刷新 おとな紙芝居」以下、「おとな紙芝居」）と関係資料を撮影し、実演音源（SPレコード）を鑑賞した。日本女子大学成瀬記念館所蔵の紙芝居についてはすでに杉崎氏による詳細な資料紹介がある<sup>1</sup>。そこで本稿では杉崎氏の資料紹介を参照しながら、おとな紙芝居の特徴について整理する。

## 一、日本女子大学成瀬記念館所蔵おとな紙芝居について

調査で撮影したおとな紙芝居は表1の通りである。このほか、「戦時家庭予算生活」、「戦時栄養方針曲」、「我が家の修理行進」、「燃料戦時譜」、「戦時家庭宝さがし」、「金の売却 五郎ちゃんのお手柄」（2部）、「生成の歓び」（2部）の台本7点と、紙芝居収納箱1点、目

録、実演を録音したレコードを撮影した<sup>2</sup>。

杉崎氏によれば、おとな紙芝居は1939（昭和14）年6月15日～21日にかけて実施された百億貯蓄強調週間に向けて日本女子大学の学生が制作した。脚本や画面の制作には大学の同窓会組織桜楓会も参加し、当時同大学で講師をつとめていた今和次郎が構図の指導を引き受けた。完成したおとな紙芝居は百億貯蓄強調週間に銀座松屋、高島屋、日本橋三越など9カ所で学生たちによって実演された<sup>3</sup>。好評を得た紙芝居は、その後も桜楓会の地方支部や家政女学校、高等女学校、国防婦人会等で実演され、依頼に応じて貸し出された。検閲印が8月となっていることから、箱に収められている紙芝居は貸出用に制作されたものと杉崎氏は指摘する<sup>4</sup>。こうした過程で制作されたことから、おとな紙芝居の内容は「生活刷新」、「貯蓄節約」を訴えるものが多い。あらすじがわかるものから見ていくと、①食費、住宅費、被服費など、費目ごとに家庭の生活の工夫を説く「戦時家庭予算生活」。②母親と子供のやり取りを通じて「お家やお道具を大事にするのも、お国の為」と説く「我が家の

表1 日本女子大学成瀬記念館所蔵おとな紙芝居

	タイトル	出版年	備考
1	戦時家庭予算生活	不明 検閲印：昭和14.8.14 検閲済 警視庁	専用箱に収納。15／15欠。台本・レコードあり。
2	国策線上のスフ	不明 検閲印：昭和14.8.14 検閲済 警視庁	専用箱に収納。
3	我が家の修理行進	不明 検閲印：昭和14.8.14 検閲済 警視庁	専用箱に収納。台本・レコードあり。
4	燃料戦時譜	不明 検閲印：昭和14.8.14 検閲済 警視庁	専用箱に収納。台本・レコードあり。
5	戦時家庭宝さがし	不明 検閲印：昭和14.8.14 検閲済 警視庁	専用箱に収納。台本・レコードあり。
6	僕モ一役	不明 検閲印：昭和14.8.14 検閲済 警視庁	専用箱に収納。レコードあり。
7	みかん箱演芸	不明 検閲印：昭和14.8.14 検閲済 警視庁	専用箱に収納。
8	生成の歓び	不明 検閲印：昭和14.8.14 検閲済 警視庁	専用箱に収納。台本・レコードあり。
9	金の召集令	不明	専用箱に収納。「戦時家計生活刷新大人紙芝居目録」に記載なし。
10	本紙のみ（作品名不明）	不明	専用箱に収納。全5枚。
11	生成の歓び	不明 検閲印：昭和14.6.14 検閲済 警視庁	13、14、16、17、18／18欠。日本女子大学家政学部児童学科より日本女子大学成瀬記念館に寄贈。



修理行進」。③生活のなかで燃料を効率的に利用する方法を説く「燃料戦時譜」。④家のなかに眠っている空き瓶や古葉書、古雑誌などの廃品も貴重な「国家の資源」であることを説く「戦時家庭宝さがし」は、いずれも日常生活を話題にしたものである。これらと作品趣向が異なるものが、版違いも確認できる「生成の歓び」である。以下あらすじを紹介する。1934（昭和9）年11月3日、北陸地方のある農村で小学校の御真影奉安殿落成式が行われる。奉安殿建設に使用された木材は、約30年前に村を襲った凶作飢饉と関わっていた。30年前、ひどい飢饉に見舞われた村の惨状に対して御下賜金<sup>3</sup>が下賜される。村人の山田良一は、御下賜金を元手に種芋を購入すると、収穫した芋を町で販売し、得たお金で杉の苗を買う。杉は太木に成長し（図1）、小学校の御真影奉安殿建築のために奉納された。そして完成したのが、今回落成式を迎えた小学校の御真影奉安殿だった。落成式から4年後、日中戦争が始まり、戦死した良一の息子道廣の村葬が行われる。村の子供たちは道廣のような立派な兵隊になること、良一のような百姓になると言う。その後、村では荒れ地が開拓され、生産品は海外にも輸出されるようになる。村は若い青年男女を満州に送り、彼らが「新東亜建設」に貢献していることを伝えて話は終わる。同作品は「昭和14年6月14日検閲印」と「昭和14年8月14日検閲印」の二つが収蔵されており、あらすじに違いはないものの、言い回しや構図が修正されている<sup>5</sup>。



図1：「生成の歓び」（昭和14年8月14日検閲印）第11景（日本女子大学成瀬記念館所蔵）

## 二、おとな紙芝居の作品の特徴

家政学部の学生が制作に参加し、今和次郎が構図の指導を受けけたおとな紙芝居の特徴として、「百億貯蓄」、「燃料報国」などのスローガンを掲示すると同時に、家庭や個人で「生活刷新」、「貯蓄節約」を実践するための方法を詳細に記していることが挙げられる。図2は「燃料戦時譜」の一場面、七輪を使用する際の炭の節約方法を絵入りで説明したものである。この場面では、七輪で魚を焼いている娘から、①なぜガスではなく炭で

焼くのか、②なぜ炭が小さいのかと聞かれた母親が、その理由として、①炭は放射熱がとんでいて焼き物に良いのに対しガスはすぐ焦げるから、②七輪には大きな炭よりも「栗大」のサイズの方が良いからと答えている。画面では「完全燃焼するためにたたき割らずにひき切って、大きさは栗大に」という一文を添えて、完全燃焼するには炭が小さい方が効率の良いことを説明すると同時に、小さくする際の注意事項も説明している。画面はシンプルな構図で視覚的に理解できるようにし、脚本では付随する情報を会話調で説明することで、「生活刷新」を実践する方法を観る者にわかりやすく伝えようとする意図がうかがえる。



図2：「燃料戦時譜」第3景  
（日本女子大学成瀬記念館所蔵）

色鮮やかな画面構成もおとな紙芝居の特徴といえる。図2では背景に紫色が用いられているが、鮮やかな色を用いて場面を引き立たせる構図はおとな紙芝居全体にわたって見られる。図3は「国策線上のスフ」の一場面、スフ（ステープル・ファイバー＝人造絹）の仕上げ方を説明しているが、ここではスフが濃い紫色で着色され、スフの皺がアイロンによって伸ばされている様子がわかる。興味深いことに、「国策線上のスフ」では、場面ごとにスフの色が異なる。衣服の合理化・簡素化で布地の代用品として奨励されたスフが色彩豊かに描かれているのも、おとな紙芝居の特徴として注目したい。





図3：「国策線上のスフ」第13景  
(日本女子大学成瀬記念館所蔵)

### 三、おとな紙芝居の実演と録音

おとな紙芝居を制作した日本女子大学校の女子学生は、実演をSPレコードに録音している(図4)。杉崎氏によれば、このレコードは1939年の10月初旬、解説として制作されたもので、音楽と擬音を入れて吹き込まれた<sup>6</sup>。



図4：レコード戦時家庭宝さがし(下)  
(日本女子大学成瀬記念館所蔵)

台本と比較しながらレコードを鑑賞した結果、修正箇所を確認することができた。例えば「戦時栄養方針曲」では、唱歌「雨」の歌詞「雨が降ります雨が降る 戦に行ってる父様の ところだけよけて降ってくれ」の「降ってくれ」(台本)を「降つとくれ」と歌ったり、会話文中の「僕の組」(台本)を「僕たちの組」と読んだりするなど、録音にあたり細かな修正が施されているほか、地の文でも加筆や修正の跡がうかがえる。また、「生成の歓び」(昭和14年6月14日検閲印)には「レコードと合わぬ為抜きとってあるのでした」という付箋が添付されており、「生成の歓び」(昭和14年8月14日検閲印)やレコードの制作に合わせて、実演しやすいよう

修正を行ったことが推測される。こうした修正のうえに吹き込まれた女子学生たちの実演音源は、台本に沿った丁寧で、アドリブや独特な節回しはない。音源から伝わってくるのは、技巧云々ではなく、張った声で紙芝居に込められた内容を伝えようとする一生懸命さだった。彼女たちにとっておとな紙芝居は「生活刷新」「貯蓄節約」を伝える実践の場であった。杉崎氏は、百億貯蓄強調週間に紙芝居を実演した家政学部第二類の学生の「国を挙げてのこの時に私達で少しでもお役に立ちたいと云ふ願が紙芝居となって一人でも多くの方に聞いて、見て、そして実行して戴きたいと云ふ熱意で声のかれるのをがんばりながらたゞ夢中で一人々々やり通しました」という声を引用するが、目的意識にもとづく「熱意」や「夢中」が、一生懸命さの背景にあったと思われる<sup>7</sup>。

### おわりに

ここまで、おとな紙芝居の特徴について、内容、構図、実演に焦点をあてて整理してきた。最後に今後の課題について展望する。当研究班では、各地での調査を通じて、戦時下の紙芝居を担い手や当該期の大衆文化を含めて捉えようとしてきた。その中で、都市の女子学生が、都市で生活する人々(百貨店の利用客)を対象に紙芝居を制作、実演したおとな紙芝居は、都市における紙芝居の実践活動の一つとして重要な事例といえる。また、本稿では言及できなかったが、家政学部の学生や今和次郎が制作にかかわっているおとな紙芝居からは、家政学の戦時下大衆へのかかわり方という論点も提起できるだろう。都市における紙芝居の実践については、依然としてその全体像は掴めていないが、本調査はこうした課題に取り組む一つのきっかけとなる有意義なものであった。

### 謝辞

日本女子大学成瀬記念館学芸員の杉崎友美氏には、情報の提供、資料の閲覧、本稿への撮影画像の掲載にあたり大変お世話になりました。この場を借りてお礼申し上げます。

※画像はすべて日本女子大学成瀬記念館より許可を得て掲載しています。

### 【注】

- 1 杉崎友美「資料紹介 おとな紙芝居」(『成瀬記念館 2023』No.38、2023年7月)。
- 2 おとな紙芝居の詳細な書誌情報については、同前76頁の表「戦時家計生活刷新大人紙芝居目録」を合わせて参照されたい。
- 3 同前、72～73頁。同頁で杉崎氏は制作時の女子学生の様子について、桜楓会発行『家庭週報』から分析している。
- 4 同前、76～77頁。
- 5 二つの「生成の歓び」の違いについては、杉崎論をも合わせて参照されたい。
- 6 同前、74頁。
- 7 同前、73頁。